

地研ニューズレター

ISSN 1882-4218

目次

- ◇受託事業 鱒ヶ沢町 地域資源の活用方策 検討成果報告会 1
- ◇青森県 提供情報のバリアフリー化調査 2
- ◇聴覚障がい者向け筆談タブレット端末の試作開発支援研究 3
- ◇西目屋村 環境基本計画策定 3
- ◇2013年度 公開講座 報告 4

受託事業 鱒ヶ沢町 地域資源の活用方策 検討成果報告会

2013年11月13日（水）に鱒ヶ沢町の山村開発センター大ホールにおいて、鱒ヶ沢町の地域活性化方策を調査研究する「鱒ヶ沢町における地域資源実態調査」の成果報告として「地域資源の活用方策検討成果報告会」が開催されました。本学研究員はコーディネーター兼報告者として参加し、一部の調査を共に担当した本学学生も報告者として登壇しました。

この調査では、鱒ヶ沢町が進めるタウンプロモーションの一連の取り組みに関する調査で、①統計情報の分析から見る鱒ヶ沢町のすがた②学生視点による地域資源の掘り起しと活用策の提言③町役場職員をはじめとした関係者によるワークショップでの地域資源の再確認と戦略構築の三つを柱としています。

報告会の開会に際し、東條昭彦 鱒ヶ沢町長からのご挨拶があった後、町の担当者の方から今回のタウンプロモーションの概要と重要性について説明が行われました。説明では、このタウンプロモーションの基本方針として「訪れてみたいまち」「住んでみたいまち」「自慢できるまち」の3つを掲げ、今後町の魅力を全国に発信し、交流人口・定住人口の増加やそれらに付随して農業・商工業など産業全体の振興へと波及させていくことを目標とする旨が述べられました。

次に、調査報告が行われました。まず栗村圭一主任研究員から各種統計情報を分析した、町の客観的な状況について報告が行われました。それによると、①鱒ヶ沢町では、人口減少が県内平均の減少率よりも大きく減少を続けている一方で、高齢女性の比率が大きくなっており、おばあちゃんが非常に元気な町であることも魅力の一つとして地元の食や伝承などの文化を保存する役割で活躍が期待できること②鱒ヶ沢町は「海の町」としてのイメージが大きいものの、統計上では農業が基幹産業でギャップがあり、海に関連した観光産業の育成も考慮すべきであること③漁業では水揚量の多くが単価の低いサメであることから付加価値が付きにくいこと④商工業が町の内需に関連するものが中心で、町外との取引が小さいこと⑤県内観光客入込数の減少があり、県内向けにも認知を高めること、なかでも周辺観光地と連携して他の観光地のついでに立ち寄ってもらう“ついで観光”が重要であること、などが指摘されました。また、今後の取り組みについては戦略管理の重要性も増すことから、取り組み内容に適した達成基準を定量的に把握して評価を行う「取り組みの見える化」も提案されました。



統計分析編を報告した栗村主任研究員

続いて中西廣研究員補助と本学学生が登壇し、地域資源の実態について調査結果が報告されました。これは、地研ニューズレターの前号でも一部ご紹介した活動の結果報告です。報告では、本学学生が考えた観光ルートが示され、鱒ヶ沢駅前と海の駅「わんど」に学生の視点から魅力的に映った地域資源が集中していることが報告されました。

これは、地研ニューズレターの前号でも一部ご紹介した活動の結果報告です。報告では、本学学生が考えた観光ルートが示され、鱒ヶ沢駅前と海の駅「わんど」に学生の視点から魅力的に映った地域資源が集中していることが報告されました。

また、鱒ヶ沢町には海や川をはじめとした自然環境の恵みを受けた多くの地域資源があり、それらの活用方法の可能性としてマリンレジャーの展開が提案されました。さらに、車を利用して町に訪れる人が多いとの情報から、町のガソリンスタンドや海の駅「わんど」を観光情報の発信拠点として強化すべきであることなどが提案されました。

その後、町の職員や観光協会、商工会職員で構成するワーキンググループによる地域資源に関するワークショップの検討結果が発表されました。それぞれのグループはテーマを「世界遺産」や「ヒラメ」、「レジャー」の3つに設定し、その分析結果を報告しました。発表者の方々は、町や町の資源を改めて認識し、戦略構築技法であるK

J法やSWOT分析、クロス分析を用いてその価値の見方を新たにしている様子でした。観光客を対象とした商品開発の提案の他にも町民が町の良さを再認識できるような郷土愛の醸成を目的とした自然塾等も提案され、多様な提案に参加者は熱心に耳を傾けていました。

最後に、参加者から質疑応答や活発な意見交換が行われ、総括の講評として、栗村主任研究員から「統計情報からは鱒ヶ沢町の過去が、学生の調査では現在が、ワークショップでは将来が垣間見えました。それらからもわかるように、これまでも、これからも町の状況は変化します。状況の変化に適切に対応し、町自らが望む方向の変化を生じさせるようにプロモーション活動が行われることを期待します」と結び、報告会は盛況のうちに閉会しました。



実態調査編を報告した中西研究員補助と本学学生

青森県 提供情報のバリアフリー化調査

本年度、当センターでは青森県がWebページなどを通して提供している各種情報について、「提供情報のバリアフリー化調査」を行っています。

この調査では、県内の“情報弱者”とされる高齢者や視覚・聴覚にハンディキャップを持つ方々に対して利用しやすい環境となっているかどうかを検証するとともに、改善策の提言を目的としています。

調査には木暮祐一地域研究センター研究員のゼミ生が参加し、最新の情報のバリアフリー対策を調査し、障がい者団体からも協力を仰いで情報提供の在り方や方向性を調査しています。

2014年1月20日(月)に県庁において中間発表会が行われました。発表では青森県に規模など比較的似た地域性があると予想される岩手県・大分県・山口県・佐賀県を選定して、それぞれの県のウェブサイトにおけるユーザビリティやバリアフリー状況を比較し、その上で青森県の情報提供と比較して優位点や改善点の指摘を行いました。

学生たちは①観光情報②防災情報③税金情報④産業支援⑤生涯学習⑥障がい者の視点から比較・評価を行いました。たとえば他県と比べて青森県のホームページでは生涯学習情報が探しにくいことを指摘したり、観光情報のページでは直感的にどのページを見ればよいのかわかるように、佐賀県のトップページで採用しているような大きなアイコンで探す項目を明確化したらいい、などといった改善を提言したりしていました。

ハンディキャップを持った方々への配慮としては、PCなどの機器の多様化・高機能化により読み上げ機能や文字の大きさを簡単に変更できる機能の付加を指摘するとともに、スマートフォンやタブレット端末対応を意識したページ構成についても勧めていました。

特に学生の観点からは、すでにWebを通じた情報発信の手段が多様化しており、大半の都道府県では動画などを用いた情報のマルチメディア対応が進んでいることから、県独自の動画を使った配信番組「あおり県庁なう」の取り組みを評価するとともに、TwitterやFacebook等と連携した情報発信の重要性を指摘し、ソーシャルネットワークへの対応の改善や、スマートフォンユーザーをターゲットとしてLINEでの情報発信といった提案も行っていました。

調査では、この中間発表会での県側の意見も反映し、今年3月までに最終報告書として県に提言される予定です。



県庁で中間発表会を行う木暮祐一研究員とゼミ生

聴覚障がい者向け筆談タブレット端末の試作開発支援研究

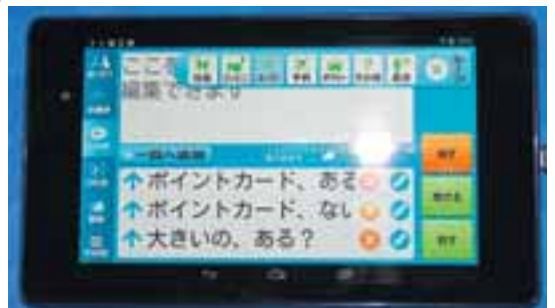
本年度、当センターでは県が推進する「青森県ITビジネス事業化支援事業」に採択された「聴覚障がい者向け筆談タブレット端末試作開発」に関連し、NECソフトウェア東北株式会社様と共同でアプリケーションの使いやすさ向上のための研究を行っています。

聴覚にハンディキャップを有する方が健常者とコミュニケーションをとる場合、一般的に筆談で行われます。しかし「時間がかかる」、「面倒」などの理由から積極的に情報を得ようとせず諦めてしまいがちになるといいます。この問題を解決するため、タブレット端末を用いて筆談をはじめ多様で簡単な入力によりコミュニケーションを円滑にし、活動的な生活をサポートすることが目的です。

本学からは香取薫 地域研究センター長の指導により香取ゼミの学生も参画し、①むつろうあ協会様からのヒアリング②アプリケーションに必要な機能を定義する要求仕様の作成③開発されたタブレット端末の評価及び端末機能向上への対応を行っています。

2014年2月17日（月）にねぶたの家ワ・ラッセで行われた「青森ITビジネス・マッチング交流会」で筆談タブレット端末が出品されました。出品されたタブレットは、一般的に市販されているタブレット端末にソフトウェアをダウンロードすることにより利用できるようになることで、特別な機器を必要としていません。入力は手書きするだけでなく、SNSやメール連携できるように工夫をしたり、あいさつや普段よく使う文章は生活シーンごとにタイプ分けして入力・表示を直感的にできるように構成されています。これら操作性や重要な文章などについて学生ヒアリングから、ろうあ者の方々にご意見を頂戴し、フィードバックされています。

NECソフトウェア東北株式会社様では、来年度から、ろうあ者の方や自治体向けにお使いいただけるよう、アンドロイドタブレットではGoogle Playなどからダウンロードできるように開発を進める予定です。



筆談タブレット

西目屋村 環境基本計画策定

香取薫 地域研究センター長が委員長を務める西目屋村環境基本計画策定委員会が、「西目屋村環境基本計画」を策定しました。本学は、西目屋村と2012年10月に連携協定を締結しており、今回の「西目屋村環境基本計画」は、以前当地域研究センターが調査協力して策定された「新総合計画」との整合が図られながら、村の環境に関する事項や施策の推進のための指針として位置づけられます。

計画では、西目屋村の望ましい地域環境の将来像を「世界自然遺産『白神山地』と岩木川の『源流』として、自然と調和のとれた発展をめざすむら 西目屋村」と設定し、村及び村民のすべての人々が、それぞれの立場で連携・協働して望ましい地域環境の将来像を実現するために取り組んでいく計画で、自然と人々が共生する持続可能な社会を築き、村民の健康で豊かな生活を実現するとともに、将来の世代に良好な環境を引き継いでいくことを目的に策定されました。

「自然環境」「生活環境」「地域環境」「地球環境」「参画と協働」の5つの視点から基本目標が掲げられており、今後はそれらに基づいて個別施策が10年間にわたり進められます。

村は、施策の実施や環境負荷が少ない事業を関係者・関係機関と連携・協働しながら実践し、村民に対する啓発と村民が行う環境保全活動を支援します。一方、村民は、生活に伴う資源およびエネルギーの消費や廃棄物の排出などによる環境負荷の低減に努めると同時に、村が実施する環境施策への協力や地域・集落で実施する環境保全活動への積極的な参加が求められます。

当地域研究センターでは、今後も連携協定を結ぶ西目屋村との連携を様々な活動を通して深めてまいります。



2013年度 公開講座 報告

本年度の公開講座は、全5講座を開講致しました。秋以降の講座では延べ423名、通年では延べ642名にご参加いただきました。本年度も公開講座後のアンケートにおいて多くのご意見・ご感想をいただきましたので一部をご紹介します。来年度も引き続き公開講座を開講する予定でありますので、どうぞご期待ください。

◆青い森「青森」の経済活性化に向けて「アクションプラン」を提言する

本講座では、「安全立県」「教育立県」「自治立県」「産業立県」「農業立県」「観光立県」の6つの視点から青森の経済活性化に向けて「具体的なアクションプラン」を提言するというテーマで全6回行われました。

延べ176名に受講いただき、10代・20代の学生から、60代以上まで幅広い世代の方々にご参加いただきました。内容についても多くの方々から肯定的なご意見・ご感想を頂きました。

ご意見・ご感想

- ・内容が易しめで市民にも非常にわかりやすく伝わったと感じた。2時間があっという間であり、また講義を聞きたい。(30代：男性)
- ・理論だけでなく、具体的な内容だったのでわかりやすかった。これからの社会の進んでいく姿が少し見えた気がする。(60代：女性)

◆人間の探求Ⅲ—心理学と仏教から—

本講座は、前半2回では心理学の視点から、後半2回は仏教の視点から全4回にわたって行われました。心理学の視点からは「方向音痴」や「嘘」を題材に展開され、仏教からは般若心経の歴史と思想について展開されました。

延べ157名にご参加いただき、中でも50代以上が7割超と非常に多くのご参加をいただきました。

ご意見・ご感想

- ・内容を身近な例えにおきかえて説明してくれたので大変わかりやすかったです。(20代：女性)
- ・身近な生活と結びつけた内容だったのでわかりやすかった。(60代：男性)
- ・講師によりいろいろ味の違いがあり興味を感じた。(70代：男性)

◆中小企業の「経営戦略」、「財務戦略」、「会計戦略」、「税務戦略」、「総務戦略」、「マーケティング戦略」を学び・磨く

本講座では、「経営戦略」「財務戦略」「会計戦略」「ビジネスプランニング戦略」中国とロシアの「海外マーケティング戦略」の視点から、経営理論を踏まえながら具体的・実践的に中小企業の課題設定と問題解決について全6回行われました。

延べ90名にご参加いただき、特に20代から40代には全受講者の半数を超えてご参加いただきました。

ご意見・ご感想

- ・分かりやすい説明で聞きやすかった。(10代：男性)
- ・自社企業の現状、あり方、方向性に対し、労働者の立場から、どの様にして企業に貢献していけるか今日の資料を参考にしたいと思います。(50代：女性)

多目的サテライト青森公立大学まちなかラボ



本学の教職員、学生とともに、地域社会に関する研究、各種プロジェクトを行う際のディスカッションの場、地域振興、産学官連携に関する相談窓口として、ご利用下さい。経営相談も承ります。

〒030-0801青森市新町1-3-7 青森駅前再開発ビル(アウガ)6階
電話:017-718-7025 Fax:017-776-2082

E-mail: lab@bb.nebuta.ac.jp

<http://www.nebuta.ac.jp/chicken/machinaka-lab/index.html>

開室時間 13:00~21:00

(毎週日曜日、年末年始、アウガ全館休館日、5~8階公共施設休館日は、休業いたします。)